

教区新報

第7号

発行
浄土真宗本願寺派
兵庫教区教務所

〒650
神戸市中央区下山手通8丁目
1番1号 本願寺神戸別院内
電話 (078) 341-5949

生かされて 生きる

「安定か、混乱か」一盧三金の熱い戦いの韓国大統領選挙が、これほど、日本で注目された事があつたらうか。ソウルでのオリンピックはどうなるのか、又、南ア航空機事故、大韓機事件、千葉沖地震、コロンカーバラ死体事件etc.と、重苦しい報道が私達を取り巻くが、なぜか、人ごとのように思われる昨今。

仕事と雑用に追われ、家に帰って一パイ飲んで寝るというだけの毎日で、一生こんな事のくり返しで終るのかと思うと、やりきれなさが胸の底からこみ上げ、ふとにもぐりこむと「人生とは」、「どう生きればよいか」と、考え込んでしまう事がありません。お釈迦様は「人生は苦なり」と教えて下さいました。私達人間は、こだわりと欲望の世界で苦しみをがらしか、生きる事が出来ない……と、よく耳にします。人生は、むずかしく、わずらわしく、思いど通りにならず、かぎりあるもので、どんなに生きていたくても、ついには、この世を去らねばなりません。聖人が教えて下さったように、「なごりおしくも娑婆の縁つきで、ちからなくして終る」ときが、必ず私にあるのです。どのような人生であろうとも、ものごとにより回されて自己を見失い、ふり返ると何も残らないような空しい人生だけは送りたくない、と思ひながら、腹を立て、グチをこぼしつつ、一生を終る人もあります。

この、ままならない人生で、私はどう生

そのうちに、私ひとりを目覚めさせるためにこうして五回も糾弾をなされる、その都度たくさんの人達が集まってみえる、私の後ろには宗教界の代表者の方もたくさん並んでおられる。「これは私に大きな責任があるぞ。日本の宗教界も目覚めよということだ。それにはまず私が目覚めなきゃならん」と思うようになった。そして、自分の腹の中を本気でぞいてみる思いになったと言えやう。

「あ、プリンス頓議議での問題の発言は、やな、町田さんの言うところによると閉会の日まあある部会から出された報告文書が読みあげられ、その中にある『われわれは日本の部落民や、インドのアンタツチャブルのような人々の苦境に深い懸念をもつべきである』という一節について日本代表の承認を求められた時のことやそうなる。その時の気持ちを町田さんはこう言うてはるな。

その第一はやな、この文案は自分にとって晴天の霹靂やったというんやな。どうやら町田さん自身この世界宗教者平和会議が人権問題が議題に出るといふことは

御同朋の社会をなむつづ

企画推進室 赤松 義光

出石組正福寺 山崎 一朗

「いや、そうとも限らんで。そややな、町田宗夫て人知ってるか？」

「町田？聞いたことありますな」

「そら、もう五年もなるかな、アメリカの世界宗教者平和会議で差別発言をしたと問題になったやろ」

「ああ、あの」

「あの、五回も糾弾を受けた人や。はじめは「だめだ、あんだだめだ。何遍やつてもだめだ」と言われる。何がだめなのか自分にはわからない。とうとう五回受けた。初めは精神的にもこたえた。しかし、

とちがいがまっか。わてら商売人には考えられんわ。仏さんは差別しなさん。私はその仏の道を読んや。だから私は差別はせえな。そんなら、銀行はたんとお金のあつたころや。私はその銀行で毎日お金を扱っている。だから私は金持ちや言うのと同じやおまへんか。あほらうて話しなまへんで。言いますやないか、昔から。紺屋の白袴で」

「そんなにボロクソに言いな。大事なものはこれからやがな。それで町田さんが次ぎに思ったことはやな、
1 これは怖い問題が出た。
2 部落問題は国内のこと、世界会議にかけることではない。
3 なぜ日本とインドだけを取り上げるのか、人権問題なら他の国だってあつてはならないか、それに部落とアンタツチャブルとは程度も性格も違う。
4 こんなことを認めたら世界中に部落問題がばらまかれる。

とにかくこれは報告文から消させねばと強硬に取り消しを求めたというわけや、その中でやね「消しなさい、一〇〇年前はあつたけど今、日本にはそんな問題はない、国も自治体も誰もそういう差別はしておらん、日本の名誉のために消しなさい」とか「部落解放といふことを理由にして騒ごう」といふ人があつてくるんやね」

「結局、その人自分の言うてることがどんなことや判つてないんでしやろ」

「判つていたら言わんやろな。町田さんはやな。自分が糾されていく中で自分の腹の中本気で覗く気にならなはつたわけや。するとあの会議のときの自分のこのころの底にながあつたのか、自分では「解放運動を理由に騒ごう」といふ人たちが」と言つたのはこれは認識不足だつた。どこまでもお詫びしなければならぬ。しかし、他の点では自分は差別者ではないと思つていたがそうではなかつた。やはり火のないところに煙りは立たぬと気付いたと言はるんや」

「へえ、御院さんその人に会わはつたんですか」

「会うわけがないがな。その後、講演会でしておられる話や。その中でやな、町田さんは会議のときの自分の心の底にあつた差別性を掘り起こしておられるんやな。私はこれは立派やと思つた。

人はともすれば町田という人がこんな差別発言をしたということという。それはたしかに問題や。だがその人がそこから自分をどう立ち直らせたかといふことの方がもっと問題ではないやろか。

何百年続いてきた日本差別社会の現在に生きていて私は差別意識なんかありませんと言っているのがおかしいんや。町田さんの言うように、心の底に埋もれている差別の種火を本気で覗いて、そこから自分を立ち直らせていく勇気、そりや、あんだの言うように度しがたいのは坊さんかもしんが、その中に町田さんみたいな人もあつてはることを知つてほしいな。それに人を糺すということもそうや。このことによつて、この人にどう変わつてほしいと願つてはるのか、そしてどう変わったか、その糺し方に誤りはなかつたか。そういう願い、点検、反省の上に立つて人を糺すといふことが行われねばあかんのとちがうか。それでないと相手は変わらんで。

考えてみいな。この辺でも行政や教育に随分厳しい糾弾があつたわな。あれから十年や。十年経過した今、相手はどう変わったのか、いや、どう変えることができたのか考えてみならんとときとちやうやろか」



門徒推進員コーナー

赤穂北組 明尊寺 中西正一 合掌

浄土真宗と私のかかわりは、まず私が浄土真宗の門徒の家に生まれたこと、小学生時代の日曜学校での寺との結びつき、そして結婚の仲人が住職夫妻であったこと等が寺との縁を深くしていただいています。そのためか、昭和五十年頃、住職の依頼で仏社結成を推進し初代会長を引受けたり、地方連研が始まった第一回の連研に参加したりしました。また門徒総代を引受けさせられる等、寺のかかわりが増え各種行事に参加する機会も多くなってきました。しかしこれらはすべて寺からの依頼によったり、その役割から努めてきたのが実体でありました。

昭和五十七年組内連研修了者の会が結成されこれに参加してまいりましたが、熱心な先輩ご同行のおすそめで受講した第四四回の中央教修、三泊四日の大谷本願での感激は昨日の如くいつまでも忘れることの出来ない思い出となりました。その後の定期研修、教区での推進員の集い、組内の門徒推進員と中仏関係者で作った染香会での集い等、仏縁の集いの私に生かされている仕合わせを感じさせてくれるものとなりました。今迄受身の私でありましたが、よくぞ人間に生まれさせていただいた有難さ、み教を聞かせていただけた有難さ、よき師、よき御同行に会わせていただけた有難さを感じ、今迄はなんと形だけの門徒でありたいと気持ちでいたってきました。この喜びを私のみでなく他の方にもお伝えしたいものと思えるようになりました。

しかし、中央教修における「任職に協力して寺報発行、掲示板活用の伝道活動」の決意表明は、なにより一つ実行できていません。ああもしたい、こうもしたいと思いつながら具体的な活動となると誠ににお恥ずかしいかぎりでありました。推進員が多数おられる寺のご様子など聞かせていただければ羨ましく、我が寺にも仲間を増やしたいものと中央教修の受講を呼掛けますがまだ実現していません。門徒推進員の活動は一人一人個々の活動が基本となりまして、推進員相互の交流、連携がより重要と思われまします。寺内、組内でできれば教区内推進員を組織して何か具体的な目標を定めてキャンペーンの運動を展開するほうがより効果的な活動となるのではないかと考えられます。希望は大きく申しますが、現実の問題として「念仏の声を子や孫に」と身近な処より出来る事から取組みたいと思えます。念仏者の一人として我が生きざまを問いつつ歩ませていただきたいと思えます。門徒推進員としての自覚のもと門徒総代等の立場から、それぞれの処で御同朋の社会を

組の活動

一 網干組の現況(昭和62年度)

一、概観
網干組は、姫路市西部の大津区(3)網干区(11)余部区(3)と、揖保郡太子町(1)御津町(6)の二十四ヶ寺よりなり、組名は組変更以前より引き続いている。何れも平坦地であって交通至便、距離的にまとまり、交流もやり易い利点がある。

二、基幹運動推進の組織
組の基幹運動推進の組織は、教区の運動体制とのつながりを考慮して、組内会をはじめ、二委員会・三部会の組織編成し、適切に人材を配分して活動の充実と円滑化を図っている。

三、各部会の活動
年度のはじめ、基幹運動推進委員会を開き、前年度のまとめと反省のうえにたつて、新年度の努力目標と行事計画を立案し、昭和六十二年度も例年のように活動を始めた。

今年度の目標は、僧侶研修の充実、「ご消息披露法要厳修」「特命布教法座の充実」であるが、各部会の活動の主なものの概略は次の通り。

1. 僧侶研修会 今年度は声聞講習会を含めて六回の研修会を開き、当面する色々な問題の研修を行った。
2. 連研部 連研企画部によって企画され、前年度より引きつづいて実施されている連研は、現在で第五期。独自のカリキュラムのもとに、「聖典」連研読本」を使って講義形式で進めている。

十名以上の人員オーバーで年令もだんだんと若くなっているようである。このたびは男子五十六名、女子七十二名、合計百二十八名。皆んな非常に熱心で、遅刻者も欠席者もほとんど無く、親子や夫婦、兄弟が机を並べての仲睦い姿も見受けられる。

3. 総代会 開法活動を中心とした総代会としてまとめはじめ、この数年は「教書に学ぶ」と題しての研修をすすめ、今年もすでに六月に研修を終えている。

昨年か組内寺院の報恩講法要にお参りするごを決定し、今年十二月に三十名の総代さん、御津町黒崎の徳善寺にお参りをして聴聞をした。(講師 雑賀 正晃 師)これから毎年一回、組内五地区を順次お参りすることとしている。

4. 壮年部 今年の研修テーマは「親鸞聖人の御生涯に学ぶ」と題して、九月に総会ならびに研修会を行った。

今回は「親鸞聖人のご生涯―真実と生きたる―(広島青年僧侶春秋会作品)のビデオを観賞し、百名近い出席者を五班に分けて、各班それぞれ別個のテーマをもって話し合っ法座を行った。

5. 婦人部 組内婦連盟結成十六年目の婦人部は、毎年「グリーナ」活動を続けているが、今年も各寺院本堂の柱に設置している竹筒の「グリーナ」基金で、門徒のうち八十五才以上のお年寄りに、敬老の日を記念して手づくりの法語集をはじめ、「お便り」やお菓子をおくりつた。このたびは百才の老人二名を含めて二百五十五名。

6. 仏書部 仏書部 毎年八月に一泊二日のサマー・スクールを、若い住職や副住・後住十三名で開いているが、今年も六十名余りの男女児童が参加した。
7. 寺族婦人部 各寺の親睦交流や法要行事の

推進母体としての重責を果しているが、長年にわたって年数回の会合をもち、その都度、会場担当の住職が独自のテーマで法話や講義を行って来た。

最近では「連研読本」による系統的な研修に切換え、今年度は四回行った。講師は竹内組長が当初より担当している。

8. テレホン部 昭和六十年九月十六日より社会福祉活動の一つとして「まごころ電話」心法語集をはじめ、電話番号は七四〇〇八七四番(ナナ夜オハナシ)と決め、毎週日曜日から日曜日まで一週間に各寺交替で担当しているが、早くも六週目に入ろうとしている。

当初は、住職をはじめ副住職や坊守の法話が中心であったが、今では総代や、仏社・仏婦の代表者も加わりバラエティーに富んできている。

一巡ごとに六、〇〇〇枚のチラシを各寺を通じて配って、内容を紹介しているが、一週間の通話回数は二五〇〇〇通話。然し、一日に二〇〇通話、一週間で六〇〇通話もなかったこともあり、兵庫県以外の近畿地方は勿論、かなりの遠隔地の利用者も増えている。

次の六週目から新しいところをみると、子供用の法語集を二回入れることとしている。

●法話集「真実心(まごころ)テレホン法話」が一巡する毎に、その原稿をまとめて法語集「真実心」を刊行しているが、八月に第四集を出した。毎集、八、五〇〇冊印刷している。(一冊百円)

第三集から、定型封筒で七〇円で郵送できるように大ききや重量などを改良し、遠方の入への施本の便をはかっている。(六十円の郵便切手三枚で申込みを受けている。)

1. 連研修了者話し合い法座 一期(四期までの連研修了者は四百四十五名(男女ほぼ同数))で、毎年地区別に「話し合い法座」を行っているが、今年のテーマは昨年、二年間の研修テーマとして決めた「なせぞ子供達の間でいじめ暴力が統率するのだろうか?」で、八月下旬に九月中旬に五地区全部が実施した。
2. 組内寺院報恩講法要日程表 組内連研結成後、仏縁の活動の一つとして、わが寺以外のお寺の報恩講にもお参りしようと申しあげたが、その頃から組内の各寺の日程が知り

たいという要望が強くなったので、早速日程表を印刷するようになって早や十年になるが、今年度は六、〇〇〇枚印刷して、各寺を通じて門信徒に配布した。

最近どの寺でも法要の参詣が増えている傾向にあることは誠に喜ばしい現象である。これ偏へ各寺の関係者の並々ならぬ努力の成果であることは勿論であるが、日程表もその一助となっていることは事実である。

この数年來、その寺には縁のなかつた遠隔地の人々も参詣があることが、住職の会合でも話題になってきている。

3. 布教大会 毎年「香光布教団」の御指導と御協力で布教大会を開いているが、会場は五地区の回わり持ちとしている。

今年七月に、下余部徳栄寺で開いたが、例年のことながら午前・午後にわたって猛暑の中、満堂で熱心な聴聞が続けられた。

五、結び
今年度もいよいよ終盤となったが、年度のはじめに決めた目標「ご消息披露法要厳修」と「特命布教法座の充実」は、お陰で組内の皆さん方の自覚と協力により、その目的を果すことが出来たと思われる。

然し「僧侶研修の充実」は、重要な課題が山積している時だけに「自信教人信」の宗祖のお心を心として、これからも慎重を期したいものである。このたび御指名により網干組の現況を紹介する機会に恵まれた、はじめてわが網干組の活動を文章にまとめてみたが、まだまだ充分に意を尽せないことも多い。

然し、何の誇張もせずありのままを綴つてみたが、みんなよく協力して頂いて今日まで至ったことが思い出されて感謝にたえない次第である。確かにわが組の活動は、何をしても協力的で参加者も多い。これは本山や教区の法要・行事に於ても同様であり、大変慶ばしいことである。

然し、こうした事にただ甘えることなく、常に活動の内容をもつと実のある、永続的なものとするべき慎重な配慮が必要である。その為には、各住職、寺族の合意にたち、それぞれの寺院経営に密着したものであって、活動の為に心身に過重を負担をかけ過ぎないものでなければならぬ。

2. 組内寺院報恩講法要日程表 組内連研結成後、仏縁の活動の一つとして、わが寺以外のお寺の報恩講にもお参りしようと申しあげたが、その頃から組内の各寺の日程が知り
- 網干組相談員 大内 憲 英
(奥浜 浄念寺住持)
- 以上